

[新収品紹介]

緑釉日本地図文角鉢(源内焼)

—高8.5センチ 幅32.1×32.1センチ 日本・江戸時代後期—

このたび大和文華館では写真のような「緑釉日本地図文角鉢」を購入し、昭和57年新春からの「日本の陶磁」展において初公開することになりました。この正方形の鉢は見込みに日本の地図を型押しの手法で表わし、やはり正方形の高台をつけ、全面に緑釉を掛けて焼き上げています。

地図には日本諸国の名が漢字や片仮名で記されていますが、今日の眼でみると決して正確な地図ではなく、当時未開の植民地であった北海道は半分以上が器面外に消え、南西端に僅かに表わされた琉球も奇妙なカタチです。しかし、左右の縁に緯度の数字が記され、日本の南海上と日本海中部に羅針盤が配されているところなどは、江戸時代中期以後にさかんとなった科学的な関心を物語る文様と申せましょう。この鉢は江戸時代後期の万能的な奇才、平賀源内(1728~79)と関係があるので、以下それについてお話ししましょう。

源内は讃岐国志度(現、香川県大川郡志度町)の下級武士の子として生まれ、長崎へ2回遊学し、江戸に住んで本草学者、物産学者として有名でしたが、文学史上に名を残すすぐれた戯作者でもありました。また、エレキテルの実験をおこない、火浣布(火に燃えない布)、寒熱昇降器(寒暖計)、金唐革、毛織物などの製作に従事し、鉱山を経営し、洋風画の先駆者となるなど、多方面の活躍をしました。

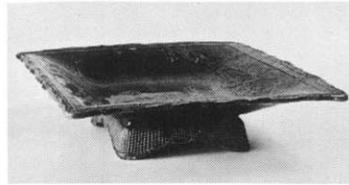
源内は若いときから製陶に関心を持ち、その法を学んでいました。そして、宝暦年間の初め(1750年代初期)から郷里の志度で職人をやとい、彼自身の指導のもと、のちに源内焼といわれた陶器を焼かせていました。一方、彼は宝暦13年

(1763)に刊行した本草・物産学上の主著、『物類品陶』(ぶつるいひんしつ)全6巻の中で、磁土や陶土について詳しく触れています。

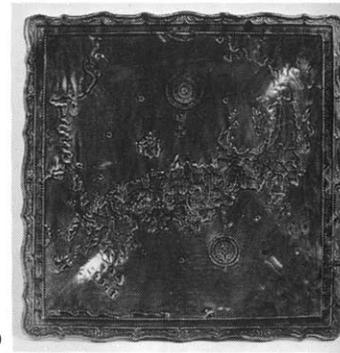
また、明和7年(1770)に2回目(1763)の長崎遊学をおこなったとき、「陶器工夫書」という建白書を其筋(おそらく幕府の天草代官)に提出し、自分の子飼いの職人を志度から連れてきて、天草の良質の陶土を使って品質と意匠のすぐれた陶磁器を作り、外国からの陶磁器の輸入をへらし、国益をはかりたいと提案しました。この提案は実現しなかったのですが、今度は天草の陶土を志度へとりよせて、良質の陶磁器を焼こうと計画しましたが、これも後援者の資金面での協力が得られず、実現しませんでした。

しかし、彼自身の事業である志度での陶業は、少くとも彼の死までは順調に続いたようです。この源内焼は一口でいうと、緑、紫、褐色などの低火度釉をかけた軟陶三彩で、交趾焼風のもので、交趾焼は中国の広東、福建の諸窯、浙江省の宜興、蜀山、鼎山などで産するもので、源内焼はその模倣と言えます。源内焼の陶土は地元(1763)の讃岐のものを使い、それに従事した陶工には堺屋源吾、五番屋伊助、脇田舜民らがいましたが、このうち堺屋源吾だけが最後まで源内に協力しました。

源内はこの志度産の陶器を各地の有力者に贈り、その宣伝につとめていましたが、幕府の勘定奉行川井越前守久敬も源内焼を贈られて、「是こそは名産品(しゅう)の焼物や、見ても薬のさえた色合」と狂歌をよみました。この歌は名産品と讃州をかけたのでしょう。また、源内が長門萩藩医栗山孝庵にあてた書簡(年次不明)には、次のよう



緑釉日本地図文角鉢



同(俯瞰)

な一節があります。

「讃州製陶器五進上仕候、是ハ私生国故陶器取立候所、堺屋源吾と申丁家之悻相応之細工仕候故、西洋画法ヲ授近世専製出候、京大坂御当地ニ而も折々唐和蘭陀物ニ紛候導承候」

ここでいう御当地とは江戸のことです。また、「西洋画法ヲ授」の意味ですが、現存する源内焼の文様には、遠近法や陰影法を採用した例がありませんから、これは「西洋風の意匠を与えて作らせた」くらいの意味でしょう。たしかに、源内焼の文様には本品のような日本地図のほか、東半球図、西半球図、獅子図のように異国的なものがあり、蘭学の開拓者源内にふさわしいという意見もあります。また、源内がオランダ渡来の最新版の世界地図を持っていたこともわかっています。

しかし、源内焼の東半球図や西半球図は、ほとんどの場合イェズ会士利瑪竇(リマंत)や、マテオ・リッチ)が作った明時代万暦30年(1602)版の『坤輿万国全図』に基づいており、当時の新知識を活用

したものではありません。また、獅子の文様も大ていは従来の唐獅子で、源内所蔵のヨンストン著『動物図譜』に見えるライオン図に基づいた例はほとんど見当りません。

そこで、源内焼は異国趣味のやきものではあっても、むしろ中国風のものであって、余り西洋風のものとはいえません。しかし、源内焼はその器形や釉色がいかにエキゾチックで、不遇のうちに死んだ洋学の先駆者をしのぶにふさわしいと申せましょう。

大和文華館では昨年秋田蘭画の小田野直武筆『江の島図』を購入しましたが、この作品については『美のたより』50号(1980年春)、及び本年9月刊の『大和文華』69号に紹介しました。直武は源内の指導を受けた洋風画家です。このたび、江戸時代の生んだ万能の天才にゆかりの深い陶器を入手できたことは、直武の絵とあわせて、まことに意義深いことです。

(成瀬不二雄)

『大和文華』第70号 12月5日発売予定

原色版	伽耶短頸双耳付繩蓆文壺 高麗黒漆螺鈿牡丹唐草文経箱 外1図
単色版	百済系中頸広口壺 外11図 参考図版多数
論文	伽耶土器一新出の作品をめぐって— 小田富士雄 高麗螺鈿の技法 河田 貞 臨瀆兵馬俑の位置づけ 佐藤 雅彦
B5版	本文37頁 定価 3,000円 (送料250円)

季刊 美のたより No.57

昭和56年 11月 13日

発行 大和文華館